

中国と私

武吉 次朗

2009年5月30日

方正友好交流の会・第5回総会での記念講演

《解説》

武吉次朗（たけよし・じろう）さんは日本の敗戦後、中国に留用され1958年に帰国。その後は日中交流の最前線で活躍され、毛沢東や周恩来に謁見された体験を持つ方である。今まで断片的に周恩来に関する体験談をお聞きしたことはあるが、敗戦前後の貴重な体験は聞いていない。そこでそのあたりをじっくりとお聞きしたいと思い総会で講演をお願いした。本稿はその時の講演記録である。

実は最初、留用体験や周恩来の思い出などを語ってほしいとお願いしたところ、予想もなかったが断られた。快諾してもらえるものとばかりに思っていたので驚いた。断られた理由は「自分の自慢話」になるからだとのこと。「結果的に自慢話になってもいいですよ。武吉さんだからこそそのお話が聞きたいのです。今、武吉さんから聞けなかつたら誰から聞けるんですか」とお話ししたところ、「少し時間をください」と言われて承諾してもらった。また再録についても渋られたが、これも後の人たちに伝える貴重な記録で「武吉さん個人のレベルで判断しないでいただきたい」とお話し、了解していただいた。

映画『嗚呼 満蒙開拓団』に周恩来の肖像写真が出てくるが、これも武吉さんが、「あの写真がいい」と言われて新華社に許可をもらい、映画に使用されたものである。

当初、羽田澄子さんから「周恩来の肖像写真が手に入りませんか」、という電話が入った。その後しばらくして武吉さんにお会いしたので、「周恩来のいい写真はないですか」とお尋ねしたところ、イタリア人が撮り周夫人の鄧穎超さんも気にいっている写真がある。中国人なら誰もが知っている写真だという。そうして新華社の友人を煩わした。武吉さんには改めて感謝の意を表したい。（大類）

私は「そもそも中国とは……」のような大上段に振りかぶった話をするのは苦手なので、「中国と私」と題して、自分が中国で体験し見聞したことを通じて、敗戦から日中国交正常化までの日中関係の一面を、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

私は1932年（昭和7年）生まれで、1945年8月15日の敗戦（「日本は戦争に負けた」と異国の地で痛感した私は、「終戦」というアイマイな言葉は大嫌いです）を中国東北のハルビンで迎えました。その年3月には『螢の光』でも『仰げば尊し』でもなく、『海ゆかば』を歌って花園小学校（日本人の小学校）を卒業し、4月からは「戦闘帽にゲートル」という当時の軍国主義スタイルの制服で、ハルビン中学校（日本人の中学校）に通っていました。

一、 敗戦前後に見た三つの軍隊

1945年夏以降、旧「満州」を舞台にくり広げられた日本・中国国民党・中国共産党・ソ連さらにはアメリカを加えた4か国・5方面の勢力の角逐について話せば、これだけで1時間はたっぷりかかってしまうので、それはさておき、私がこの目で見た3つの軍隊についてお話しします。

[関東軍] かつて「精鋭」と謳われた関東軍は、主力が南方と本土に転出し空洞化した後、敗戦の1か月前に在「満州」日本人男性（40歳以下）を根こそぎ動員したものの、武器不足で戦闘力が失われたので、ソ連と開戦の際は、在留邦人を見捨てて南満に撤退する方針を極秘裏に固めたのですが、そんなことは露知らずの民間人は「いざとなれば関東軍が守ってくれる」と思い込んでいました。

8月9日、ソ連が日本に宣戦布告し「満州」に攻め込みました。11日に、親友（父親が関東軍の中佐で、南方に転出した留守家族でした）が飛んで来て、「急に帰国命令が出た、さようなら」と言い残し、行ってしまいました。ずっと後になって聞いたところ、関東軍の高級将校家族と「満州国」の日本人高級官僚家族だけが特別仕立ての列車に乗り、朝鮮経由でさっさと帰国したのでした。これはハルビンだけでなく、各地で一斉に実施されたことが、後日判明しました。

「ハルビンから南へ20kmの平房に、関東軍の秘密施設があるらしい」とは、私たちもうすうす聞いてはいましたが、まさかあの731部隊とは想像もできませんでした。その平房の方向から、8月15日の夜（森村誠一著『悪魔の飽食』によると、敗戦の数日前から）、爆破音が聞こえ、わが家の窓ガラスがビリビリ震えるほどでした。悪魔の痕跡を消そうとしたのでした。爆破音は数日つづきました。

翌16日、街の様子を見ようと商店街に出たところ、中国人の家の軒並みに青天白日旗（当時の中華民国国旗）が掲げられており、仰天しました。誰が、何時、これだけ多くの旗を用意したのだろうか？ 日本の敗戦を知らなかったのは日本人だけだったとは……強い衝撃を受けたことを記憶しています。

[ソ連軍] 9月2日、つまりミズーリ号で日本が降伏文書に調印した日ですが、その日にスターリンがモスクワでおこなった演説を、私はビラで読みました。「われわれは、日露戦争で失った領土（樺太南部と千島）と権益（中国東北の鉄道と不凍港の大連・軍港の旅順）を取り戻した」と高らかに謳っていましたが、ロシアの国益むき出しでした。

8月18日、ソ連軍がハルビンに進駐しました。とたんに、男狩り・女狩り・略奪と暴行の嵐が吹き荒れました。わが家にも、何度もやって来ました。私がいたアパートで飼って



講演する武吉さん（写真・師岡武男）

いた2匹の犬が猛然と吠えかかるや、われわれが「マンドリン」というあだ名を付けた自動小銃で、「キャン」と泣く間もなく殺されました。つづいてドアが乱暴に叩かれました。すぐ母と2人の姉、それに避難して来た親戚など数人の女性を、半間の押入れの上下段に潜ませ、私が大きな洋服だんすをエッチラオッチラ動かして押入れを塞ぎ、それから父と2人でソ連兵に対応しました。ソ連兵が来るたび、これを何度もくり返しました。

級友の記録には、こう書いてあります。「わが家に押し入った若いソ連兵は見るからにみずぼらしい軍服を着ており、長靴の先は破れ、汚れたつま先が見えています。「時計をよこせ」と威嚇するので、仕方なく父が腕時計をはずして渡すと、汚れた袖を捲りあげ、どこかで先に奪った5～6個の腕時計に加えて父の時計をはめ、ネジが切れて針が止まっている時計をはずし、わが家に捨てていきました。当時の時計はねじ巻き式でしたが、時計のねじを巻くことすら知らないのです。」「次に台所に行き、砂糖、メリケン粉、味の素など白いものは何でも同じと思ったのか、大きな袋と一緒にに入れて持ち帰りました。いったいどんな味がしたのでしょうか。」わが家も、そしてハルビン、いや「満州」各地の日本人の家はすべて同じ目に遭いました。被害は中国人にも及びました。

当時、中国共産党の率いる八路軍（東北民主連軍と呼ばれた）の参謀長だった伍修権は、回顧録にこう書いています。「ソ連軍の規律がひどかったのは、正規の軍人に刑事犯人をまじえていたからだ。ドイツとの戦争で兵力の損害が甚大だったため、服役中の囚人たちを最前線部隊に加えた。もともとまともな人間でない連中が勝利者きどりでやりたい放題振舞ったため、中国人民にも悪い印象を与えた。」この嵐は、さすがにソ連軍当局の取り締まり強化により1か月ほどで収束しましたが、日本人に拭いがたい悪感情を植え付けました。

ソ連軍は、「軍票」を発行しました。何の裏づけもない紙切れですから、一種の収奪の手段にほかなりません。総額は、当時の価格で10億元ともいわれます。またソ連は、敗戦の時「満州」にあった日本企業を「すべて中ソ合弁企業にしよう」と当時の中国国民党政府に持ちかけましたが、これにはアメリカも強く反対し、中国政府に拒否されると、工場・鉱山・発電所などの設備から180kmにおよぶ鉄道レールまでを、「戦利品」と称して撤去し持ち帰りました。関東軍軍人以外の「男狩り」は、この撤去と貨車への積み込み作業のためでした。もともと中国人民に返すべき資産だったのですが。

この時期に、奥地から開拓団員が、着の身着のままどころか、麻袋（ドンゴロス）一枚を頭からかぶっただけでハルビンにたどり着き、市内の小学校などの難民収容所に入りましたが、飢えと寒さと発疹チブスなどの病気で、大勢の人が命をおとしました。

[八路軍] （後に東北民主連軍→東北人民解放軍→第4野戦軍と改称） 中国共産党はもともと東北をきわめて重視しており、日本の敗戦と同時に14万人の八路軍と、党中央委員の3分の1を昼夜兼行で東北に送り込みました。国民党軍も米軍艦艇と輸送機の支援を受け、精鋭部隊を東北南部の大都市に送りました。東北では、ソ連軍が1946年5月初めまでに撤退した後、地域により事情が異なりました。大連はソ連が抑えたので国民党軍は入れませんでした。瀋陽は八路軍の進駐をソ連が認めなかったので国民党軍が入りました。

長春は市街戦をへて八路軍から国民党軍に入れ替わりました。私が住んでいたハルビンは八路軍が4月28日に無血入城しました。

粗末な軍服に不ぞろいの武器を持って、聞いたことのない歌を歌いながら、元気いっぱい行進して来ましたが、それが「三大規律・八項注意の歌」だったことを、後になって知りました。これは1927～37年の第2次国内革命戦争期に毛沢東が定めた、民衆と一体になり民衆に奉仕する革命軍隊の規律で、1935年には歌になり、文字の読めない兵士でも毎日歌うなかで理解し、実行できたというものです。8節まであります。悪声ながら、第1節を歌ってみましょう。(歌う)

大通りに面したわが家のはす向かいに大きな木材倉庫があり、八路軍の1部隊が駐屯しました。当時、わが家では小さな食品店を開いていましたが、駐屯した部隊の事務長が毎日、食材と調味料などを買出しに来ました。穏やかな態度で、キッチンと代金を払っていくので、ソ連軍とは大違いだなと感心しました。一度「ラジオはないか」と聞かれたので「ソ連の兵隊がとっくに奪って行った」と答えたところ、なんとも理解できない様子。数年後、仕事の中で中国語が上達してから、たまたま職場の食堂で隅に山積みされた唐辛子を見たとき、「あの時、事務長が買ったかったのは、ラジオではなくてラージオ（辣椒、唐辛子の中国語）だったんだ！」と気づき、申しわけなかったと悔やんだものです。今でも思い出すと恥ずかしくなります。

八路軍の進駐後、治安は急速に回復し、日本人民会に協力して難民救済もそれなりに進展しましたし、日本人の小中学校も「塾」という形式でしたが再開されました。8月から10月にかけて待望の引き揚げが始まりましたが、この期間は国共内戦が双方の合意で一時停戦になり、国共双方が引き揚げ事業に協力してくれました。

二、日本人の「留用」

「留用」とは、一定期間留めて任用する、という意味の中国語です。

中国東北にいる日本人（民間人）の引き揚げが日程にのぼったころ、中国共産党は国民党との内戦が不可避と判断し、対応に追われていました。一つの深刻な問題は、戦争に不可欠の医療関係者が圧倒的に不足していたことでした。中国側の史料によると、東北に進駐した八路軍の医療要員は1600人に過ぎませんでした。また、工業技術者も不足していました。そこで、日本人の中から適任者を残すことが決まりました。

「留用」の方式はさまざまでした。まず、私は「組織ぐるみ」と呼んでいますが、一部の病院は院長以下全員「留用」になりましたし、私が働いた軍工部の工場は、新潟から「満州」に疎開した「理研機械」という会社の技術者がそっくり「留用」になったので、職場では新潟弁が飛び交っていました。次に、中国側による指名がありました。日本人に履歴書を書かせ、適任と思われる人を残したのです。逆に、日本側責任者による指名もありました。「私も残るから、君もぜひ残ってほしい」と要請したわけです。満鉄中央試験所の丸沢常哉所長が、贖罪意識からそうされました。さらに、寄る辺がなく、「八路軍に参加したら、とにかく食べられる」と加わった若い人たちもいました。要するに、「残留させられた」人がほとんどで、思想信条から進んで残った人は、ごく個別だったわけです。

「留用」の分野と規模について。医師、看護師など医療関係の専門職が 3000 人（このほかに炊事や下働きの補助要員が 2000 人）といえますから、前述の八路軍の人数と比べ、初期に日本人が担った役割の大きさが分かります。次に、戦場で負傷兵を搬送する「担架隊」には、元「満蒙開拓青少年義勇軍」の少年たちが大勢参加しましたし、トラックやジープの運転手もいました。林弥一郎少佐の率いる関東軍第 4 錬成飛行隊の 300 人は、中国人民空軍の創設に協力しました。

軍工部という軍需産業部門にも大勢いましたが、後に各業種の民需産業へと移っていきました。重要なエネルギーの石炭は、鶴崗炭鉱だけで 1800 人の若者が採炭現場で働きました。紙幣や新聞に必要な製紙工場、鉄道、変わったところでは「満州映画協会」の監督や技術者が 200 人残り、東北電影製片廠（映画製作所）の立ち上げと記録映画・劇映画製作に協力しました。

私は父と姉婿の「留用」にともない残り、14 歳で軍工部の工場に見習い工として入り、火薬で染めた軍服を着て働き、その後黒竜江省の駝腰子というところにある金鉱（砂金）に転じ、坑木に使う木を山で切り出す樵（きこり）、機材修理工場の旋盤工、倉庫管理員などをへて、統計員として事務所で働きました。「留用者」は全部で 1 万数千人、家族を合わせると 2 万数千人にのぼりました。

残された当初、日本人には不満をもつ人が多く、「早く日本へ帰りたい」「でも、戦争に負けたのだから仕方がない」が共通の心情でした。しかし、八路軍の厳正な規律と穏やかな態度から、恐怖心はありませんでした。また、たしかに苦しい環境でしたが、中国人の同僚も同じでしたから「敗戦国民として懲罰を受けている」とは感じませんでした。さらに、日本人特有の「職人氣質（かたぎ）」から、病院でも工場でも、与えられた仕事は決して怠けず、手抜きせず、細心にやり遂げました。

中国国防大学の徐焯教授が書いた『1945 年・満州進軍』という本が日本語に訳されていますが、次のような記述があります。「解放軍の将兵だった筆者の両親や多くの古参幹部は、日本人医療関係者を口々に絶賛した。日本人看護婦は仕事を割り当てられると『はい』と一声で応じ、いいかげんなどころは一つもなく、丁寧に遂行して、中国人同僚に深い印象を与えた。」

これに対応して、中国共産党は次のような政策を定めました。「留用の日本人は捕虜ではなく友人である。政治の面では日本軍国主義者と明確に区別し、一視同仁にあつかう。仕事の面ではその技術を尊重し、努力を信頼する。生活の面では同等に処遇し、可能な範囲で配慮する」というものでした。

この政策を、当時の中国共産党幹部たちは率先して徹底実行しました。上司たちからしばしば「何か困ったことはありませんか」と聞かれなかった日本人は、一人もいないでしょう。あの人間的な魅力は忘れがたいものでした。「人民に奉仕する」という理念はお題目ではなく、毎日接する幹部の言動そのものでした。これに、われわれは「しびれました」し、「まいった」のでした。そして「この人たちが必死で取り組んでいる事業に、われわれも協力しよう」という機運が芽生え、盛り上がったわけです。今にして思えば、中国共産

党がいちばん輝いていた時期だった、と言えましょう。

同じ釜のメシを食べ、同じオンドルで起居を共にするうち、日中双方それぞれにあったわだかまり（日本人には心の隅に「シナ人に対する優越感」があり、中国人には「憎き日本の鬼という反感」がありました）が消え、連帯感が芽生えてきました。

解放戦争の戦局が、毛沢東の予言どおり急展開していったことも、日本人を驚嘆させ、中国共産党の主張への関心を高めました。中国共産党の本拠地だった延安が国民党に占領されたと知って、私たちがお先真っ暗な気分になり落ち込んだとき、中国の幹部は「われわれは必ず全国解放の日を迎える」と断言しました。夢物語のようでしたが、果たせるかな、そのとおりの進展になり、われわれを感服させました。

「人生、意気に感ず」と言いますが、仕事にいつそう励むことによって、表彰者が輩出しました。中国側の公式記録によると、第4野戦軍で働いた日本人医療要員の80%以上が表彰されたとありますが、これはほんの一例にすぎません。

前述の空軍パイロットの養成は、創立された東北航空学校で、林少佐はじめ日本人の熱心な教育と中国人学生の懸命な努力により成功し、これが基礎になって、朝鮮戦争ではソ連から購入したジェット機を操って、ベテランの米軍パイロットと渡り合えたのです。4年前に北京で『新中国に貢献した日本人たち』という本が刊行され、留用日本人の事績がくわしく紹介されましたが、私も訳者として出席した出版記念会には王海・元空軍司令官（東北航空学校の1期生で、朝鮮戦争の戦闘英雄）も出席し、かつての日本人教官を偲びました。淡々と話されるのですが、聞いているうち、胸が熱くなりました。

建国後すぐ、日本との文通が始まりました。さらに、日本にいる家族への送金も可能になりました。建国直後の中国にとり極めて貴重だった外貨を、このような面に使えたのも、中国側の厚い配慮と言うべきでしょう。奥さんを日本に残した私の同僚も毎月送金したので、「ご主人はよほど立派なところにお勤めなのですね」と近所で評判になった由でした。

戦争である以上、犠牲は避けられません。戦場で、あるいは不慮の事故で亡くなった日本人の名前が、各地にある烈士墓地に刻まれています。

先ほど申し上げたとおり、このような事績を取材し、まとめた本が刊行され、日本語訳は私が翻訳を依頼され、担当しました。後藤田正晴先生から、「本書に登場する人々は、戦争で破壊された日中両国の友情を、自ら汗と血で修復して、今日の礎を築かれた」という推薦の言葉をいただきましたが、これが先生の絶筆となりました。

三、日中交流と周恩来

私は青春時代を中国で過ごし、中年期は日本国際貿易促進協会という民間団体に奉職して日中経済交流に微力を尽くし、初老に至ってから大学で教育と研究に専念するという3段階の人生を歩んできました。ここからは中年期の話になります。

国交正常化前の日中経済交流の際立った特徴は“以民促官”、つまり民間の力で政府を動かしたことで、経済界は中国との国交正常化を求める国民運動の一翼を担いました。

中国の対日方針は、毛沢東と周恩来を軸にして、建国初期からしだいに形成され、1960

年代、つまり方正の日本人公墓の建立が認められたのとほぼ同じ時期に完成したと、私は推測しています。その対日方針のポイントを私なりにまとめると、「日本軍国主義者と日本人民を明確に区別し、日本各界と協力して『以民促官』で、国交正常化、さらに世世代代の友好を実現する」というものでした。その根底には、「万国の労働者、団結せよ」というマルクス主義の階級観があり、その背景には、第2次大戦後の連合国による戦後処理・戦後和解の方針があったわけですが、もう一つ、この方針の実行が可能であることを実証した事例が、戦後間もなく、ほかならぬ中国東北で起きていたことがあげられます。それが先ほど述べた「留用日本人」の活躍だったのです。

周恩来総理は1954年に日本の訪中団と会見した際、「留用」された日本人の事績を次のように高く評価されました。「日本が降伏した後、中国の東北で中日両国の人々の間に友情が芽生えました。一部の日本軍人と居留民が中国に残り、中国の同僚とともに働きました。昨日まで敵だったのが、今日は友人になったのです。日本の多くの友人がりっぱな仕事でわれわれを援助していただいたことに、たいへん感謝しています。かつて戦火を交えたものが、武器を捨ててともに働き、しかも互いに信頼しあったのです。多くの中国人が負傷したとき、日本の医師に手術してもらい、病気になったとき、日本の看護婦に看護してもらいました。信頼していたからです。工場でも、中国人は日本の技術者を信頼し、いっしょに機械を動かしました。科学研究機関でも、中国の科学者は日本の科学者の研究成果を信頼しました。これが友誼であり、ほんとうの友誼、たしかな友誼といえましょう。これこそが、我々の友好の種子なのです。」

このような実績が高く評価され、「日本人民と手を組んで世世代代の友好を実現することができる」という自信を、中国首脳に持たせる一つの力になったと言えるでしょう。

ただ、このような対日方針を実行するためには、中国人民への教育と説得が不可欠でした。中国人民にとっては、8年にわたり日本軍国主義により侵略され、苦しみを嘗め尽くし、恨み骨髓に徹していたのですから、特に次の2点が難しかったようです。

① 日章旗の掲揚をめぐる。1956年に北京と上海で、1958年には武漢と広州で、日本商品展覧会が相次ぎ開催されましたが、国際慣例に沿って会場入り口に「日の丸」を掲揚したとたん、人民の不満と抗議が殺到しました。「あの旗を見ただけで、侵略され暴行されたことが思い出され、血が逆流し体が震える」「なぜ掲揚するのか」これに対し中国側は周総理の指導により、ポールの下に解放軍兵士を立てて旗を守るとともに、人民に「今来ている日本人はかつての侵略軍隊とは違い、友好増進に努めている人たちだ」と、中日友好に関する説明と説得を進めました。

② 対日賠償請求の放棄。国交正常化の前夜に上海でおこなった調査によると、大半の庶民は「国交正常化は結構なことだが、賠償は当然取るべきだ」「賠償を取れば給料がみんな1ランク上がる」などと考え期待していたようです。中国政府は、「中国人民は、甲午戦争（日清戦争）や義和団事件（北清事変）などで巨額の賠償を取られたことで、賠償の苦しみを体験している。この苦しみを日本の次の世代に味あわせることは、世世代代の友好にとり良くない。われわれは自力更生で国づくりを進める」と、説得に努めました。

日中双方の協力と努力により、民間ベースの交流は経済・文化など各分野で小規模ではじまり、しだいに展開され推進されました。経済分野では、中国経済の発展にともない、中国の存在感が高まり、中国との友好を唱える経済人が急増し、やがて半官半民の覚書貿易も発足して、民間ベースの友好貿易と「車の両輪」を形成しました。経済界が国交正常化を求める国民運動の一翼を担ったことは、政治を力強く後押ししました。文化分野では、松山バレエ団など舞台芸術の相互訪問と公演、日本映画週間の開催、卓球やバレーボールなどスポーツ交流がさかんにくり広げられました。特筆すべきものとして、仏教界の交流があげられます。戦争中に強制連行され日本の鉱山などで働かされ死亡した中国人の遺骨を、仏教界と友好団体で結成された中国人俘虜殉難者遺骨送還実行委員会の努力で収集し、1950年代に2300柱を送還しました。

こうして1972年の初頭になると、日中国交正常化を求める国民運動は空前の盛り上がりを見せ、各党・各界・各紙がこぞって主張するまでになりました。何かにつけ意見が真っ二つに割れるのがあたり前の日本で、国論がこれほど一致したのは、戦後初めてのことといえます。

さて、周恩来の人格の魅力に話を進めましょう。

中国の指導者で、周恩来ほど多くの日本人と会った人は、いないでしょう。私も5回、お会いする幸運に恵まれました。周恩来が会った外国人の中で、日本人は断トツのトップでした。

まず、握手の仕方が違います。中国幹部の中には、あさっての方を見ながら握手する人もいますが、周恩来は丁寧に握手しながら、あの澄んだ目で相手の目をじっと見つめるのです、まるで、相手の心の中を見透かすように。たいていの人は、これでしびれてしまいます。

次に、周恩来が外国人と会見する際は、閣僚や局長など関係部門の責任者が同席するのですが、周恩来は時々、彼らに数字などを質問します。そのとき周恩来がいちばんきらいな回答は、「だいたい」「たぶん」といった表現で、われわれの目の前で叱責します。ですから幹部たちは、何を聞かれてもすぐ正確に答えられるよう、大きなカバンに書類を詰め込んで着席、待機していました。

周恩来が会った日本人は政治家や著名人だけでなく、一介の庶民にいたるまで、広範にわたりました。たとえば、★1970年12月6日、故・浅沼稻次郎社会党委員長の夫人一行と会見した際、同行した女婿がTV記者で、ちょうど日本で注目されはじめた「公害問題」を担当していることが分かったと、すぐ「説明会を開いてくわしく理解するように」指示しました。★同年12月8日には、菅沼正久信州大学教授および3人の農民と会見しましたが、事前に関係者多数を召集して同席させ、日本の農業の実態について6時間にわたり質問し勉強しました。日本側が「稲の収穫は反あたり何俵」というのを、中国の単位である「1ムーあたり何斤」に換算するのですが、その換算がいちばん速かったのは周恩来だったと、菅沼教授から聞きました。この会見のホールに入りきれなかった人たちは、別室でスピーカーを通して聞いたそうですが、その中に、後の外交部長、唐家センさんもいたそ

うです。

次に、実にこまやかな考慮・配慮があげられます。いくつか例を挙げてみると、★1963年4月30日、中国から初めて日本に行く貨物船の「躍進号」が、途中で沈没しました（乗員は全員救助されました）。私はたまたまその10日前に日本国際貿易促進協会の事務局で勤務しはじめたばかりだったので、なおさら強い印象を受けた事件でした。協会が最初に受け取った電報には「国籍不明の潜水艦に魚雷を3発受けた可能性もある」と書いてあったので、内外から注目されたわけですが、周恩来は自ら上海に飛び、交通部と海軍の尻をたたき、実情調査のため艦艇と潜水員を派遣した結果、「座礁のため沈没した」との結論を出し、一件落着となりました。この過程で周恩来は「もし鱧が来たとき、潜水員の対策はとってあるのか」とまで細かく質問し、担当者を驚かせたといわれます。★さきほどの浅沼夫人ですが、会見の際、和服を着て行かれたので、人民大会堂の長い階段を下りるとき寒空にさらされないよう、「帰りは地下の特別通路を使うように」と指示された由です。★外交部の若い職員によると、周恩来が主宰する会議で晩くなったとき、「もう外交部の職員食堂は閉まっただろう、君たちはここで食べて帰りなさい」と、自腹を切って、人民大会堂で夜食をふるまったそうです。

さらに、抜群の記憶力があげられます。方正の松田ちえさんの名前を覚えていたのは、皆さんご存知のとおりですが、地方出張で乗った飛行機や列車の乗務員の名前を、次に会った時ちゃんと呼びかけ、乗務員たちを感激させたのは有名です。これに関連して、いささか自慢話になって恐縮ですが、私の名前の「次郎」の「朗」は「明朗の朗」で、日本でも中国でも、よく「郎」と間違えて書かれます。中国のある稟議書で、当時貿易団体の北京連絡員だった私の名前にこの「郎」が書いてあったのを、周恩来が決裁したとき、「郎ではなく朗の筈だ」と付記されたと、中国の関係者から聞き、とたんに涙があふれました。あの超多忙な方が、何回かしか会っていない外国人の若造の名前を覚えておられたとは……

文化大革命でいちばん混乱していた1967年8月22日、外交部の「極左・造反派」が北京の英国代理大使館を焼き討ちし、大きな国際問題になったことがありました。これを知った周恩来は激怒し、首謀者を逮捕するとともに、英国側に公式に謝罪するよう外交部に指示したのですが、当時の社会の雰囲気呑まれ、「英帝国主義に頭を下げる」などともないと、誰もキチンとお詫びできない。そこで周恩来は、みずから英国代理大使に謝罪しました。ですから、あの混乱の時期に、公式の場で周恩来が姿を見せると、各国外交団は、「彼が健在なかぎり、この国は大丈夫だ」と判断したといわれます。

「革命第一、工作（仕事）第一、他人第一」という言葉がありますが、私は、周恩来こそ、この言葉を生涯かけて実践した人だと思えてなりません。文化大革命が熾烈を極め幹部たちが相次ぎ「打倒」されたとき、周恩来は「私が地獄に入らなければ、誰が入るというのか」と、悲壮な決意で複雑な諸問題と格闘したのでした。

たとえば、ある大学で2派に分かれて対立している紅衛兵を説得するとき、若者を座らせながら、自分は立ったままなので、見かねた紅衛兵が「総理、お掛けください」と言うと、「いや、自分はもう3日間、一睡もしていないから、座ったらとたんに眠りこけてしまう」と断ったそうです。このことを話してくれた中国の女性幹部は、「ああ、私たちのすばらしい総理！」と言って絶句し、涙を拭きました。

だからこそ、周恩来は中国人民に敬愛されましたし、1976年1月8日に亡くなったときは全中国が慟哭したのです。外交部で対日関係の仕事をした丁民さんという畏友が、周恩来の死後20年以上たってから、総理（彼は、われわれの世代が「総理」というのは周総理のことだ、と言います）の訃報を聞いた時の思い出を、日本の大学生に語った速記録があります。「入院中の私は、明け方寝つけないのでイヤホンでラジオを聴いていて、訃報を知り、そのトランジスタ・ラジオを持ってナースセンターに駆け込み、皆で大声をあげ泣いたのを覚えています。……（筆記者注：丁民氏は講演しながら泣いていたので、次の言葉が出た）……失礼しました。」

1月15日の追悼会当日、「四人組」の巣窟だった上海では、政府職員に追悼行事をさせないため、わざわざ冬空に郊外へ行かせ農作業をさせたのですが、追悼会が始まる時刻に、黄浦江に停泊中の船も通行中の車も、一斉に汽笛とクラクションを鳴らして、敬愛する周総理を偲んだそうです。

私はその1か月後の2月に訪中しました。どの訪問先でも、まずお悔やみを述べたのですが、「周総理の死去に……」と話しはじめると、男性の幹部は顔をゆがめ、女性の幹部はすすり泣きはじめ、日本語で話しても通訳も声にならず、実に辛い旅を経験しました。

私にとり忘れられないことがあります。日中貿易関係業界では、年初に「賀詞交歓会」を開くのが慣例になっており、1976年は1月9日に開くべく、準備万端整えていました。ところが当日早朝、訃報が飛び込んできました。私どもはすぐ中国大使館の了解をとり、交歓会を中止することにして、事務局総動員で1000人近い出席予定者への連絡に追われました。それでも漏れた人がいるかも知れないので、私ら数人が予定されていた会場に行き、事情を知らぬまま来られた方に説明し、お引取り願いました。それから数人で中国大使館に行ったところ、翌朝から弔問を受け付ける準備ができていたので、私たちはホールに掲げられた周恩来総理の遺影の前で黙祷を捧げましたが、在りし日の思い出がよみがえり、号泣しました。肉親以外の死亡で泣いたのは初めてのことでした。

ここに1976年1月9日の日本の各紙夕刊を持ってきました。朝日、読売、毎日、日経、産経、東京、夕刊フジ、いずれも1面トップに周恩来の訃報を大きく掲載するだけでなく、すべて数ページの特集を組んで、その偉大な生涯と日中関係で果たした貢献を称えています。2月10日には日比谷公会堂で「周恩来総理国民追悼会」が開かれ、私も参列しましたが、三木総理はじめ各界の人々が来場され、広い会場の外まであふれる人の波でした。

慶応大学の添谷芳秀教授は労作『日本外交と中国』の中で、「親中国派の動機」について、次のように指摘しています。彼らの根底には、2000年にわたる交流を踏まえた絶対的ともいえる親中国的感情があった。親中国派は、第一に「脱亜入欧」への反省として「アジア

主義」的発想を共有していた。第二に日中間の経済的相互補完性も重要だった。さらに、中国との何らかの個人的体験があった。また、中国侵略に対する贖罪意識があった。こう列挙した上で添谷教授は、「これらの人々にとってそれ以上に決定的だったのは、周恩来との出会いであった」「たとえば周恩来が岡崎嘉平太に対して示した真摯な態度には、政治的計算以上のものがあった。それでなければ、岡崎が周恩来を『人生の師』として仰ぐことはなかったであろう」と述べていますが、適切な指摘と思えます。その意味で、「周恩来なくして今日の日中関係なし」とさえ言えるのではないのでしょうか。

そろそろ時間になりました。魯迅は、「地上にはもともと道はない。歩く人が多くなれば、おのずと道ができる」と言いました。廖承志さんが戦後はじめて来日したとき、羽田空港でこの言葉を引用しながら、交流拡大への熱い期待を示されたのですが、私も大勢の人たちとともに、日中交流の道を、一步一步歩んできました。いま両国の間には、頑丈な鉄橋が架けられています。その橋を支えているのは、無数のねじ釘です。私はその一本のねじ釘になりたい、できれば、いつまでも錆びないねじ釘でありつづきたい。これが私の念願です。

ご静聴、ありがとうございました。

[付] 三大規律、八項注意

三大規律：一切の行動は指揮に従う。

大衆の物は針一本、糸一筋も取らない。

一切の捕獲品は公に帰する（私物化しない）。

八項注意：話し方は穏やかに。

売買は公平に。

借りた物は返す。

壊した物は弁償する。

人を殴ったり罵ったりしない。

畑の作物を荒らさない。

女性をからかわない。

捕虜を虐待しない。